

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

妖精のクラッカー

### 【作者名】

ポン2

### 【あらすじ】

マギとフェアリーテイルのクロスした作品です。本作品の主人公はギルダーツであります。ヒロインはヤムライハを考えてる予定です。更新はかなりおそいのでよろしくお願いいたします。

# マギ×ギルダーツ

## 主人公紹介

名前：ギルダーツ・クライヴ

性別：男

職業：魔導士

年齢：45歳

魔法：クラッシュ

触れたものを全て粉々に砕く。これにより無意識に周りの建物を壊してしまう癖がある。

技：破邪顕正・一天（はじゃけんせい・いってん）

妖精の法律（フェアリーロウ）

術者が敵と認識したものを全てをうつ超魔法

ギルダーツがマギの世界にいたらという好奇心だけで作っちゃいました。ちなみにギルダーツはフェアリーロウを使えるという設定です。見たいかたはどうぞ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

俺は今とても混乱している。

何故かって？

決まっている。

いったいここはどこなんだ？

マギ×ギルダーツ

今この島ではあちこちで争いが起きている。この島には国があり、王がいて、国民がいる。この島の名はシンドリア王国。今この国は組織による攻撃を受けていた。それを防ぐためシンドバットは彼の部下である八人将に各場所であつうように命じてあり、あちこちで戦闘が起きているのであつた。

そんな中ある森の中では戦闘がおきてるのにもかかわらず、警戒心なしで歩いている男がいた。その男の名はギルダーツ・クライヴ。魔導士ギルドフェアリーテイルのS級魔導士であり、フェアリーテイル最強候補の一人である。

「いったいここはどこなんだ？まわりはうるさいわ。天狼島じゃなさそうだし。」

ギルダーツはさっきまでのことを思い返してみる。

「たしかガキどものS級昇格試験で天狼島にいつて闇ギルドグリモアハートができてアキノロギアが出てきて島ごと吹っ飛ばされ

たはずじゃ……まあ考えたってしかたねーか。お？女の匂いがする。まずはそこに行くか。」

ギルダーツは変態であった。過去何人も女を抱いたギルダーツの鼻はもはや滅竜魔導士のナツと同じくらいの嗅覚をもっていた。ギルダーツはまわりの障害物を無意識にバラバラにしながら歩いていくのだった。

そのころギルダーツの進む方向の海の上では八人将のヤムライハとアポロニウスが戦っていた。

「シャルール・バラク」

水流がうねりながら鋭い矢のようにアポロニウスめがけていく。

「ふぉーふぉふぉふぉ！そんな攻撃きかんわ」

だが闇の金属器使用であるアポロニウスはそれを黒い球体を当てることで防ぎ持久戦にもちこんでいた。そして何回かこのやりとりが続き、ついにヤムライハのマゴイがつきてしまった。

「マゴイがつかたよっだの」

そういつと闇の金属器でヤムライハの装飾を壊していく。

「いゃー」

「ふぉーふぉふぉふぉー！いいさまじゃ。所詮魔導士なぞ我ら金属器使いの敵ではないぞ。」

「ゲスジジイ。ごたくが多いわよ。ああー、弱い犬ほどよく吠えるってやつね。」

「おっ・・・おのれえー、わしの全身魔装をみるがいい」

そういうとアポロニウスは闇の金属器と合体し昆虫みtainな姿になった。

「極大魔法フラーシュ・アルフラーフ」

巨大な光線が、ヤムライハめがけて発射された。それがヤムライハに当たろうとしたときにヤムライハは驚いた。なぜなら

「たく、そんなあぶねー魔法を女にむけて放つもんじゃねーっての。」

アポロニウスが放った極大魔法はギルダーツのクラツシュによって粉々になったのだった。

「え？」

「なにい？わしの極大魔法がバラバラに」

ヤムライハは後ろを向いた。そこには全く知らない人が陸地に立っており、腕をこっちに向けたまましゃべっていたのだから。これがヤムライハとギルダーツの運命の出会いとも知らずに。

「おのれえーーおのれえーーきさまーー!!!」

アポロニウスはマゴイがつかたのか全身魔装が解け、ギルダーツに突進していく。その途中でヤムライハをスルーして。

「え？ちよつわたしスルー!?」

ギルダーツは自分に向かってくるアポロニウスを目に入れて少し魔力の質をあげる。

「うるさいぞじいさん。少し黙っててもらおうか。」

そしてアポロニウスの突進がギルダーツに決まろうとしたときにギルダーツの攻撃が決まった。

「破邪顕正・一天」

ギルダーツの拳がアポロニウスの下あごに決まり、アポロニウスは星となったのだった。

こうしてこの場所での戦闘は終わったのだった。ヤムライハは戦闘が終わったので陸地に降りてギルダーツのところへ向かう。

「大丈夫か？おじょうさん。」

ギルダーツは自分の上着をヤムライハにかけてあげる。そうすると当然ギルダーツは上裸になるのだがヤムライハは一つ気になるのを見つけた。

「ありがとう。助かったわ。おかげであんなジジイ殺らなくてすんだわけだし。それよりも、その左胸にある紋章なんだけど・・・」

ギルダーツはああと納得した顔になった。

「こいつは魔導士ギルドフェアリーテイルの紋章だ。自己紹介といくか。俺はギルダーツ・クライヴ。フェアリーテイルの魔導士だ。」

「フェアリーテイル？聞いたことないわね。私はシンドリア王国シンドバット王の部下、八人将の一人のヤムライ八よ。よろしく。ギルダーツさん。」

「ヤムライ八か、いい名だ。それにしてもフェアリーテイルを知らないか。となるとアクノロギアのブレスの衝撃でかなり遠い地方に飛ばされたか、空間を飛び越えて違う世界にきたか、だな。」

「ん？」

ヤムライ八はギルダーツが後半何を言ったのかが聞こえなかった。

「妖精に尻尾はあるのかないのか？永遠の謎、故に永遠の冒険」

「それは・・・」

「これがうちのギルド、フェアリーテイルの名の意味だ。」

「随分素敵な意味をもっていたのね。」

ヤムライ八は笑顔で答えたのだった。

## マギ×ギルダーツ2

シンドリア王国対組織の勝敗はシンドリア王国の勝利で終わった。シンドリア王国に紛れ込んだギルダーツはヤムライ八といっしょに王であるシンドバットのところへ向かうところであった。

「それにしてもギルダーツさんは魔導士だったんですね」

「ギルダーツでいい。」

「そう、ならギルダーツはさっき何の魔法を使っただんですか？」

「ああー、あれかあれはクラッシュっていつてなあらゆるものを破壊できる超上級魔法だ。」

ギルダーツは頭をボリボリかきながら答える。そして右腕を横にむけるとそこにあった木がバラバラになった。

「まあこいつのせいで無意識に発動しちゃまうのが難点なんだがな」

ヤムライ八はギルダーツを見る。上から下まで。あきらかに私よりは年上で魔導士でひげが生えててかっこいいし強いし。あれ、これ私の好みのタイプなんじゃ・・・ヤムライ八の視線を感じ取ったギルダーツは不思議がる。

「どうした？そんなじろじろみて。俺の身体になんかあんのか？」

「えっっいやっあの、その」

ヤムライ八はビククリしてあわてだす。そしてギルダーツは自分



の身体を見る。そして納得がいった。

「ああなるほど、そりゃ聞きたくても聞けねえな。俺の左腕と左足。まあいいさ、これもなんかの運命かもしれないからな、武勇伝聞かせてやるよ。」

ギルダーツはおもいつきり勘違いしてるのだがあえてつつこまない。ヤムライハは運命という言葉に敏感に反応したが何故かギルダーツのことをもっと知りたくなって今か今かとまっている。

「(あれ、私どうしたんだろう。もしかして私、ギルダーツに恋!?)」

そんなヤムライハの心中を知らないギルダーツは語り出す。

「こいつはつい最近の出来事なんだがな、俺はギルドの仕事で1000年クエストに挑んでたんだ。」

「1000年クエスト?」

「ああ、1000年クエストってのは1000年間誰もその依頼を成功させたものがないという意味があつてな。まあそれに挑戦してたんだ。だがその途中でドラゴンにあってな、戦闘になったんだが手も足も出ずにこのざまってわけさ。まっ、そのせいでクエスト失敗ってわけさ。」

ヤムライハはギルダーツの左腕と左足を見て悲しそうな顔になる。それよりも気になる単語が出てきた。

「ドラゴン!? いるんですか? ドラゴンが」

「ああ、アクノロギアってドラゴンだ。多分今ごろ世界中がその名を

知ってる！」

「アキノロギア・・・聞いたことないわね。」

そしてギルダーツは思ったことが確信となった。

「やはりそうか。思ってた通りだ。」

「ん？」

「最初に言っておく。俺はこの世界の人間じゃない。」

「え？この世界の人間じゃないって・・・アキノロギア・・・ファイアーレ王国、魔導士ギルド、フェアリーテイル・・・まさかそんなことって」

どうやらヤムライハも気づいたようだ。その頭脳の高さにギルダーツは誉める。

「ああ、それはもう事実だろう。俺はっていうより俺たちのギルドはS級昇格試験を天狼島って場所でやってその途中に闇ギルドが襲ってきた。追いついたらアキノロギアが出てきてプレスで島ごとふっとんだはずで気づいたらこの世界にいたんだ。」

「そんなことが」

そんなこんなで話したらむらじやら宮殿にいったようだ。

「いじでシンドバット王にあってもらひつわよ。」

「ああ」

そしてしばらくして

「入っていいわ」

そしてギルダーツは王のいる部屋、シンドバット王がいる部屋に入った。

ギルダーツはあたりを見渡す。ギルダーツにとっては王宮の部屋がどれほどいいかなんてのは正直わからないがまあ広いなってぐら이었다。

「ようこそ、わがシンドリア王国へ。」

ギルダーツを待っていたのは20代ぐらいに見える身長高めのイケメンだった。

「俺の名はシンドバット。」このシンドリア王国の王をつとめている。よろしくたのむよ。」

「俺はギルダーツ。魔導士ギルドフェアリーテイルの魔導士だ。よろしく。」

おたがいが握手する。それからギルダーツとシンドバットは酒を飲みながらいろいろ話していた。ヤムライハはシンドバットとギルダーツに酒をいれてあげている。ヤムライハがわざわざする必要はないのだがギルダーツのそばにいたいと思っ**て**やっているのだ。

「それにしてもギルダーツも王も今日の夜は謝肉祭(マハラガン)なのに大丈夫なんですか?」

「なあに、たしなむていごでよったりはしない。」

「ギルダーツは酒強いんだな。」

「娘に比べたら俺は弱い。」

とまあこんな感じで話が進んでたんだがヤムライハは途中からおかしくなっていた。

「(むすめ？え？じゃあギルダーツは……)ギ、ギルダーツ。」

ヤムライハの震える声に反応したギルダーツはヤムライハを見る。

「どうした？」

「ギルダーツって娘がいたんですか？」

ヤムライハは震える声でギルダーツに聞いた。シンドバットはヤムライハの今の状態を理解した。

「ああ、そういえば話してなかったな。娘はいる。名前はカナで俺と同じギルドに所属している。それよりも震えてるが大丈夫か？部屋まで送ろうか？」

ギルダーツのこの言葉によってヤムライハは涙を流して杖にのって部屋に行ってしまった。シンドバットはやれやれといった感じでギルダーツはなんなのかまだ気づいてない様子。

「ヤムライハはいったいどうしたんだ？」

「はあー、気づいてないのか。まあ一言だけ教えとくとあの状態のヤムライハはおとめて」ことだ。」

「なっ………なにー………!!!俺はいつ手だしたんだ?そんな記憶はないぞ。いったいいつからだ?くそっこの俺が女性の気持ちに気付かないなんて。シンドバット、部屋まで案内たのむ。」

さすがのギルダーツでも気づけたようだ。シンドバットは王を使うよとかなんとかいってたがヤムライハの部屋まで案内する。

「ここがヤムライハの部屋だ。多分いると思うが、まあ頑張るんだな。」

そういうとシンドバットは手を振りながら歩いてどっかへいく。残されたギルダーツは扉をノックしてドアをあけて中に入る。そこにはベッドで泣いているヤムライハがいたのだった。

つづく。

## マギ×ギルダーツ3

ヤムライハの部屋に訪れたギルダーツはヤムライハの近くまでいく。

「その、なんていつかすまねえ。ヤムライハの気持ちに気づいてやれなかった。俺はこの世界にきて帰る手段を考えていた。そのせいか、恋愛なんて柄じゃなかったし、娘もいるからな。だが、娘はいても妻はいない。妻は俺のもとから離れて風の便りでいつちまってるのを聞いている。」

ヤムライハは目に涙を浮かべてギルダーツの話をきいている。

「だが、今は違つ。これからはヤムライハをちゃんと見る。一人の女として。俺にお前を愛する資格をくれねーか。ヤムライハ」

「・・・そついつの何て言うか知っていつてるの？浮気よ。浮気。私はギルダーツの浮気相手にはならないわ。ギルダーツなんて本当最低!!ギルダーツのことなんて・・・!?!?」

ヤムライハがギルダーツに怒鳴っていたときギルダーツはヤムライハの唇を奪っていた。それに対してヤムライハは涙を流しながら言う。

「なんで。なんでなのよ。なんでそこまでして・・・」

「俺は確かに最低だ。今まで何人も女と付き合ってきた。それはもう変えようのない事実だ。そして今度はヤムライハ。お前だ。俺

はお前を愛する資格もなにもないのかもしれない。だが、これだけは言わせてくれ。俺はこれからはヤムライ八自身を見ることにする。一人の女として。もし、俺に愛する資格をくれるのなら俺はその時にもう一度ヤムライ八と向き合おうと思う。一人の男としてな。とまあかたくなっちまったが俺はここらで失礼させてもらうわ。じゃあな。」

そうしてギルダーツは部屋から出ようとした。だがそれは一人の声によってとめられた。

「まっつー。」

ギルダーツは声が出たほうへ振り向く。そこには自分呼び止めるヤムライ八がいた。

「その、なんていうか、わたし、今まで男性とつきあったことないの。それでもいいの?」

ヤムライ八は涙声で言う。

「そんなもん、俺がなんとかしてやるわ。」

「それじゃあ、その、これからよろしくお願いします。」

「ああ「ちんぷ」ぞ。」

こうしてギルダーツとヤムライ八は正式に付き合っこととなった。次の日にはギルダーツとヤムライ八の関係はばれていて国中に広まっていたのだった。

そして無事謝肉祭も終わり、アラジン達も旅だったところから話は

また始まる。

「いっちゃった」

ヤムライハはギルダーツに寄り添いながら海へ旅だったアラジン達の船を見つめる。

「ああ。ガキどもの成長を見るのはやっぱりいいもんだな。」

ギルダーツはフェアリーテイルのことを思う。そんな様子を見たヤムライハは思うところがあるのかギルダーツ聞く。

「やっぱりギルドに帰りたい？」

「ああ、だが今はまだいいさ。」

そうしてギルダーツとヤムライハは王宮に戻ろうとするが

「ちょっとまってくれ。ギルダーツ」

ギルダーツとヤムライハは振り向くとシンドバットが真剣な顔で呼びかけていた。

「ヤムライハも聞いていってくれ。」

シンドバットはヤムライハにもきいてほしいと言う。二人はなんのことも分らなかった。だがシンドバットから告げられたことを聞いて二人は驚くことになるのだった。



## マギ×ギルダーツ4

真剣な顔で呼びかけていたシンドバットはヤムライハにもきいてほしいと言つ。そして二人が驚くべきことを言つのだつた。

「ギルダーツとヤムライハに任務を頼みたい。」

ギルダーツとヤムライハはシンドバットから任務内容を聞く。その内容はこうだ。

「バルバットに突如表れた魔導士どもが暴れてるらしい。王宮の手に負えないようでシンドリアに助力を求めてきた。そこで魔導士なら魔導士ということでお前らを送ることをきめたんだ。」

「なるほどな。それで、その魔導士の情報はあるのか？」

「ああ、一人一人は分からないがリーダーならある。リーダーの名はブルーノートというらしい。」

その言葉をシンドバットが言った瞬間、シンドバットとヤムライハは突然息苦しくなる。なぜならギルダーツからあふれる魔力が怒っているからだ。

「そいつの名前はブルーノートであつてるんだな？」

「ああ。」

「わかった。」

ギルダーツは無言のまま王宮にもどっていく。取り残されたシン

ドバットとヤムライハはギルダーツがいきなり変わったことに驚いた。ヤムライハはギルダーツのことを心配な眼差しで見つめていた。

王宮にある自分の自室に戻って荷物をまとめているギルダーツのところにはヤムライハがやって来た。ヤムライハはもう荷物をまとめており、いつでも出発できるみたいだ。

「ギルダーツ。ブルーノートってもしかして・・・」

「ああ。ヤムライハの思ってることであってるさ。あいつはうちのギルドに手を出してきた闇ギルドグリモアハートの魔導士であり、俺の娘の命を奪おうとした張本人だ。」

「そうだったんだ」

「さて、バルバットに向けていくぞ。」

こうしてギルダーツとヤムライハはバルバットに向けて旅に出るのだった。そしてここから時間は流れて流れて今はバルバットに向かう船の中である。今この二人は突如出てきた海王生物と戦っている。

「クラッシュ」

「シャルール・バラク」

「じつじつ風にどんどん出てくるモンスター達を倒しているのだった。」

「なぞで、じつじつ出てくんだよ。」

「確かに、ちょっとしつこい！」

ギルダーツ達がモンスターを倒す数が50体ぐらいになってきた。ギルダーツとヤムライハはさすがに不信に思い、何が原因かを考える。

「このあたりの海域はいつもこうなのか？」

「いえ、たまに出てきたりはするけどこれは異常よ。このあたりで何か起きているはず。たとえば……海の中とか」

「海の中か。」

いくらギルダーツといえども海の中に及ぼす魔法は持ち合わせていなくどうしようか考えていた。するとギルダーツの乗る船の近くに樽が漂っていた。それに気づいたギルダーツは船員に回収してもらい、中をあけた。するとその中には変な機械が入っていた。

「なんだ？」

「魔法道具……ではなさそうね。」

見た目が車のエンジンのような機械がそこにあった。すると突然その機械が喋り出した。

「タ・・タノミマス。」

「じつ、しゃべったぞ。」

「生きているの？」

ギルダーツとヤムライハは機械が喋りだしたことに驚いた。

「ワタシヲ・・・コワシテ・・・クダサイ」

機械は自分を壊してほしいと言う。

「なんだ？いきなり」

「何か理由があるのね」

「ハヤク・・・コワシ・・・テ」

すると突然機械からどす黒い波があたりをおおいつくした。

「なっ何が起きてやがる。」

「闇？」

闇がおさまってくると機械だったものの姿が変わっていた。その姿はまるで悪魔の用でその悪魔が吠えるだけでまわりの海王生物達は狂ったように暴れだす。

「じいつは!?ゼレフ書の悪魔・・・だと!」

「ゼレフ書の悪魔?てことはギルダーツの・・・」

「ああ間違いない。とするとゼレフもこちら側にいる可能性もあるな。まあまずはじいつをどうにかするぞ。」

「りょーかい。」

こうしてゼレフ書の悪魔とギルダーツ達の戦いが始まるのだった。